



Safety and efficacy of mucous fistula refeeding in low-birth-weight infants with enterostomies

著者名	矢部 清晃
発行年	2021-01-15
URL	http://doi.org/10.20780/00032798

主論文の要旨

Safety and efficacy of mucous fistula refeeding in low-birth-weight infants with enterostomies

低出生体重児の遠位腸瘻への便注入の有効性と安全性に関する検討

東京女子医科大学附属八千代医療センター 小児外科
(指導：幸地克憲 臨床教授)

矢部 清晃

Pediatric Surgery International 第 35 巻 第 10 号 1101 頁～1107 頁

(2019 年 10 月発行) に掲載

【要 旨】

当院では、腸瘻造設した低出生体重児に対し、栄養状態改善を目指して近位腸瘻からの排泄便を 3 時間毎に遠位腸瘻へ注入している。その有効性と安全性を検討した。2006 年 12 月－2018 年 12 月に、腸疾患により小腸瘻を造設し、後に腸瘻閉鎖した低出生体重児を対象に遠位腸瘻へ便注入した群(便注群)と便注入しなかった群(対照群)に分類し、後方視的に比較検討した。また注入便を経時的に培養し、時間経過に伴う細菌叢の変化を調べた。便注群 10 例、対照群 6 例で、経腸栄養開始後の 1 日平均体重増加量は、便注群で便注前 10.6g/日、便注後 17.6g/日と便注入後に良好な体重増加を得た($p=0.002$)。経静脈栄養期間は、便注群 25 日、対照群 87 日で、便注群で経静脈栄養期間は短縮した($p<0.01$)。静脈栄養関連肝障害は、便注群 1 例、対照群 3 例で便注群に少ない傾向であった($p=0.12$)。注入便の培養結果で MRSA など病原性細菌叢の出現は無かった。便注入により経静脈栄養期間は短縮し、静脈栄養関連肝障害の発生も抑制された。注入便の培養結果から病原性なく、便注入に伴う合併症も認めなかった。低出生体重児の遠位腸瘻への便注入は、患児の体重増加も良好に得られ、有効で安全であった。